

現場と研究者をつなぐ

—韓国農楽の2010年代の研究動向

韓国では2010年代に入ってから、民俗芸能である「農楽」(プムルクツとも呼ばれる)に関する研究会が盛んに開かれるようになった。本稿では、その研究動向を紹介する。

農楽研究における当事者と研究者の関係

筆者が身を置く民族音楽学では、研究者自身が音楽の実践を行ったり、当事者との綿密な対話を行うのはもちろんのこと、研究成果を再び当事者と共有して理解を深めることが理想とされている。しかし韓国でも日本でも、研究者が各自の視点から論じた見解を当事者と共有することなく終わるケースは少なくない。農楽の研究もこれまで現場と研究者に大きな隔りがあった。

そもそも、農楽は日本人研究者によって植民地期に言及されるようになり、その後は主に国文学者によって民謡や仮面劇などの研究の流れのなかで扱われてきた。また、その後は個々の地域の事例報告が増えたが、これをもとに農楽という芸能の特色や時代による変化を丹念に考察するような研究は少ない。またこれまで研究者と当事者の対話が持たれる研究会もほとんどなかった。

2010年代の農楽研究会の動向

ところが、韓国では2011年頃から農楽の実践者が関わる研究会が増え始めた。その理由のひとつに、農楽を主題にして博士学位を取得した若手研究者が現れ始めたことが挙げられる。そのほとんどは大学の農楽サークル(韓国では1980年代に学生運動が盛んになり、その一環として農楽サークルが活発になった)の出身者で、現在も農楽の担い手として現場に関わる人々である。

まず、2011年6月にプムルクツ学会が発足した。創立当初は、村祭りや巫俗儀礼、民謡などの幅広い分野の研究者たちが一堂に会することに重きが置かれた。

この学会発足後の12月に、「若手プムルクツ研究者による学術クッパン」が別途開かれた。この集まりは、先述のプムルクツ学会とは異なり、実際に農楽の演奏経験や知識を持つ者同士で深みのある意見交換の場を持ちたいという設立意図があったという。「クッパン」というのは儀礼や祝祭の場という意味であるが、ここであえて学会という言葉ではなく民俗的な用語を用いているところ

も、現場主義の構成員たちのアイデンティティを示しているといえる。この研究会は全羅北道の高敞農楽保存会の共催により、高敞郡で開かれた。その後も2012年には南原農楽保存会、2013年には霊光右道農楽保存会の共催で、それぞれの伝承地で催された。

この頃の研究会で発表されたテーマには、農楽のリズム、歌、舞踊、チャプセクと呼ばれる道化役が登場する演劇、村祭りや保存会、伝授教育システムのあり方などの分析があった。最近ではより具体的な現場を伝える報告も加わった。2018年8月19日に筆峰農楽伝授館で開催されたプムルクツ学会では、カナダ・オーストラリア・日本・中国の韓国系移民や現地の人々による農楽団体や交流事業など、各文化圏での農楽の多様化が注目された。また、農漁業を基盤とした村落社会の持続が難しい現代において、「村の無い村祭り」をいかに伝承していくべきかについて熱い討論が交わされた。

高敞農楽保存会による学術的プロジェクト

筆者が研究や活動のパートナーにしている高敞農楽保存会も、やはり2011年から3回にわたって高敞農楽に特化した学術大会を開催し、その成果を書籍として刊行した。さらに注目すべきは2018年に開催された「人文学コンサート」のシリーズである。このシリーズでは研究者による特定テーマの講演と、それに関連する農楽の演目の上演を行っている。第1回は旧正月の村祭りがテーマで、地元出身の歴史研究者が高敞地域の民間信仰について解説し、筆者も旧正月における日韓の門付け芸能について発表した。その後で門付けの農楽が上演された。そのほかにも、農楽の楽器に注目した回など全4回の公演を行った。研究発表と演奏がセットになっていることによって、観客が農楽についての理解を深め、感動を得られる有意義な内容になっている。高敞農楽を学ぶ大学生たちや、地元の農楽愛好家などの関心も集め、好評を博した。

また、同保存会では「農楽の目名唱・耳名唱プロジェクト」と題した事業も行っている。「目名唱・耳名唱(ヌンミョンチャン・クィミョンチャン)」とは、歌や楽器の名人だけでなく、芸能に造詣の深い「名人級」の観客たちこそが芸能を支えているという意味のことばで、伝統芸能の世界でしばしば

用いられる。この企画は、研究者などを高敞農楽の舞台公演に招待し、批評文を書いてもらい、それを新聞やSNS、ホームページなどに記載してさらなる意見交換を目指すというものである。近年では農楽も舞台化が進み、ミュージカル風に構成された作品などもつぎつぎに創作されている。このプロジェクトは、このような新たな動向にも着目し、多様な意見を交換できる「目利き」の層を育てる効果もあるといえるだろう。

日本でも近年「民俗芸能の創作」に関する研究は散見されるものの、依然として創作に否定的な研究者も多く、学会でも主要関心テーマにはなりにくい。また保存団体など芸能の担い手側から、伝承の現状に関する意見を発信できる場もあまりない。それは、日本の民俗芸能が依然として地域コミュニティのなかでのみ保存・継承されている場合が多いからだといえるだろう。韓国の場合は戦争や高度経済成長を経て、地域コミュニティ内での民俗芸能の継承が困難になり、学生などの外部の人々が地域を訪れて学んだり、プロの演奏者がこれを舞台化するなど、日本とは異なる状況が見られる。そのため、必然的に民俗芸能の創作に関する研究者の関心度も高まっているといえるだろう。日本でも今後は韓国での状況を見習いつつ、研究者がもっと柔軟に現場と協力し合い、現代社会に息づいている芸能の研究を展開していかなければならないだろう。



高敞農楽保存会主催「人文学コンサート」(2018年10月25日、韓国全羅北道高敞郡)。

文・写真 神野知恵

国立民族学博物館学術資源研究開発センター機関研究員。専門は民族音楽学、民俗芸能研究。2006年より韓国の農楽の研究を続けている。現在のテーマは専門芸能者による門付け芸能の日韓比較。著書に『韓国農楽と羅錦秋—女流名人の人生と近現代農楽史』(ブックレット「アジアを学ぼう」43、風響社2016年)。